

◆今年度の研究の成果と課題◆

I 研究全体について

1. 研究主題・サブテーマは適切であったか？

○良い。

○新学習指導要領における「生きる力」の育成の理念に合ったテーマである。また、本校の「話すこと・聞くこと」に関わる力が弱いという実態や「言語活動の充実」という改善事項から国語科にしばったサブテーマも適切であった。

2. 研究内容・研究方法・研究組織・研究計画は適切であったか？

○良い。

△サブテーマのもとでの1年目の研究なので、今後より一層の具現化した研究内容にすることが大切である。

3. 校内研究会の持ち方は適切であったか？

○良い。

○年度当初から研究会が実施できたことはとてもよかった。

昨年度の児童の実態把握をもとに、今年度は「国語科」にサブテーマをしばって研究を進めた。言語活動の充実が叫ばれる中で、適した研究内容であると言える。

サブテーマに関わった具体的な計画をもっと早く提案できたら、今年度の研究がもっと深まったと思うが、研究推進が遅かった。



II 授業研究について

1. 授業研の回数は適切であったか？

- 全学年で実施することは授業力のアップのためにもとても重要である。
- 回数はよい。
- △年度のはじめに、学年や時期についての見通しがもてるといいと思う。
- △一人一実践の授業参観は、もう少し早めにとりくめばもっと見にいけたかも・・・。

2. 研究主題の達成度について

(各学年の授業中の子どもたちの姿などから)

- 学びの基礎基本としての「話すこと」「聞くこと」への意識化ができたと思う。今後の継続が大切である。
- 学年によっても達成度がちがうと思う。でも、今年度やるべきことはみんながんばって取り組んだと思う。
- 「話し方・聞き方あいうえお」、行事での感想発表など、全校で共通理解のもと取り組んだことにより成果があったと感じられる。
- 学級でも自分の考えを発表する場を意図的に増やし、話すことへの抵抗は少しずつなくなっていったように思う。準備しておいた内容（原稿あり）では話せるが、その場で自分の考えをまとめて話すということはまだできない子もいる。

「話し方・聞き方あいうえお」など全校で共通理解して取り組むことができたのは、一歩前進という感じである。しかし、「話し方・聞き方あいうえお」作成までに時間がかかりすぎてしまったために、サブテーマの「国語科」特に「話すこと」「聞くこと」に関わる具体的な指導法の研究が進まなかった。さらに一人一実践の授業実践の時期が遅くなり、授業の目標・内容も決めづらくなった。

一人一実践の授業の様子を見ると、各学年の発達段階に応じた指導により、自分の考えを話すことができているように感じた。児童の力をさらに伸ばすための指導法について、来年度以降、共通の方法で一人一実践を行って、指導法が有効であったかどうか検証していく必要がある。



Ⅲ 学習意欲について

○本校の教育実践の中でも最も成果の大きい取り組みの1つになったと思う。

○子ども、保護者への啓発をさらに進めていきたい。まさしく「継続は力なり」となる。

家庭学習に対して、全校で統一して、2回も取り組みができたことは、児童の学習意欲を高めるために大いに有効であった。学習意欲向上ブロックの先生方に感謝である。今後継続して取り組んでいくことでさらに意欲を高めていきたい。



Ⅳ 本年度の成果と課題について

1. 成果

○「話すことあいうえお」「聞くことあいうえお」によって、言語活動の充実に向けた第一歩が歩み出せたと思う。

「しっかり話す」「正しく話す」

「自分の考えを伝える」

「聞いたことや読んだことをもとに自分の考えをもち、相手にわかるように話す」

といった力が児童に欠けているということが昨年度の実態把握でわかり、今年度は「国語科」に教科をしぼり、「話すこと」「聞くこと」の指導について探る1年となった。

「話し方あいうえお」

「聞き方あいうえお」

を作成し、全校共通理解のもとで取り組むことができたのは、大きな成果である。

また、新たに「学習意欲向上ブロック」を組織し、家庭学習を中心に、これも全校で取り組むことができたのはよかった。

昨年度までも一人一実践を行っていたが、今年度は、できる限りではあったが、それぞれの授業を参観し合うこともできた。各学年の児童の実態を見ることができたということや職員それぞれの指導の仕方を見合うことができたということも今後の研究の一助となった。

2. 課題

○「話すこと」「聞くこと」について、各学年の系統化を図ることが必要。各学年の具体的指導事項を洗い出し、系統表を作成し、それに基づく授業実践を行う。

今年度行った一人一実践の成果と課題や「話すこと」「聞くこと」にかかわり指導要領に示されている各学年の目標や指導事項ををもとにしながら、1年生から6年生までの見通しを持った系統表を作成する。また、適切な指導法を研究した上で、授業実践を重ね、指導法の有効性を検証していく必要がある。

